

何者でもない

2025. 6. 12

「何者でもない」自分になれる場所があるとよい。そう思うのだが、そのための時間を設けるまでの気持ちの強さがない。何者でもないとは、役職や地位、経歴、肩書にとらわれないことである。何者でもない自分になるためには、自分のことを誰も知らない場所に行く必要がある。

福島でも、何者でもない自分になれるのか。場所によっては、なれないこともない。だが、自分のほうが何者かである自分を意識してしまっている。もしかしたら、知り合いに会ってしまうかもしれない。地元、すなわちホームでは、どうしても意識せざるを得ない。

では、どうすればいいのか。旅に出るのが一番である。それも、海外がよい。日本を出てしまえば、役職も経歴も関係ないだろう。いや、間違えた。役職は、忘れないようにしなければならない。とはいえ、自分のことを知る人は誰もいない。すなわち、何者でもない自分に近づくことができる。

昔、イタリアにいたことがある。ローマに3年間住んでいた。当然、パスポートを持っていた。一般の日本人のそれとは色が違っていた。公用パスポートだった。教員なのだから、ちゃんとしなければならないのは、もちろんである。それ以上に、大げさに言うと、日本国を代表して来ているのだという高い意識が求められた。パスポートは、何が何でも無くすわけにはいかなかった。肌身離さず命と家族の次に大事なものという位置づけだった。

今度は、何者でもない自分になって、再びイタリアの地に降り立ちたい。自分のことを誰も知らない土地に行き、景色を眺めながらボーッとしてみたい。それも何時間にもわたって。そうすれば、何者でもない自分になれるかもしれない。

本来であれば、何者でもないというのは、忙しい日々を送っている中でも、地位や肩書を忘れて過ごすことができる場所や時間があることが大切だということであろう。今の自分であれば、ちょうど通勤途上に、スペシャルティコーヒーが飲めるお店がある。何度か行ったことはある。まだ、素性を明かしてはいない。聞かれないので、こちらから言う必要もない。仕事帰りに、ふとこのお店に立ち寄るのが、現状から考えられる選択肢となる。

ふいに、そうしてみようかと思うこともある。だが、このお店には、こちらからすると欠点がある。席がカウンターなのである。小さすぎる、狭すぎるのである。できれば、ある程度の広さのある店内の一角でゆっくりしたいものである。目の前に若いマスターがいては落ち着かない。何度か通ううちに、会話をするようになるのは目に見えている。そうなると、何者でもないではなくなってしまう。とりあえず、当分の間は、何者でもないことに憧れを抱きながら日々過ごしていこうと思う。